

I. 出発前夜

京都の田舎に住んでいた頃、家に居た猫を、私は「ファルボ」と呼んでいた。その茶褐色の毛並みが何となくファルボ的であったことと、一徹そのような構えがよく似ていた為に、そう呼ぶようになったのである。後に、人からもらって飼うようになったセキセイインコには、「サルヴァトーレ」と名付けた。ついに、雄か雌か判らないまま死なせてしまったが…。

私は、ファルボが好きだ。ムニエルも好きだが、どちらかという、彼には尊敬の念の方が強い。言わば“高嶺の花”である。その点、片思いには違いないのだが、ファルボには非常な親近感を覚えている。

ブラッコもいいし、ボッタッキアーリもいい。アマデイ、マネンテ等も好きな作家達だが、彼等は余りに洗練され過ぎている。穏健な都会派である。強烈な個性といったものが、その風采からも作風からも感じられない。そこが少々ものたりない。

ところが、ファルボと来たらどうだろう。シチリアの空に燦然と輝く南国の太陽、むせかえるような土の匂い。そして、その土にまみれたシチリア人達の荒々しいまでの喜怒哀楽。彼はこんなに風土の中で育った自然児である。強烈な個性を持った自然児である。しかも、明晰な頭脳を持った音楽家でもある。素朴なシチリア人達の喜怒哀楽はこの明晰な頭脳に還元されて、音楽に生まれかわった。いや、生まれかわったというよりは、なお一層の透明さをもって、その素朴さと、荒々しさと、人間らしさが描き出されたと言うべきかもしれない。

好きだから種々な事を考える。

写真を見ながら考える（写真①）。左手をポケットに突っ込んで、悠然と左半身に構えた姿には、どことなく品がある。その気取ったポーズにも厭